

自動運転等公共交通のスマート化に向けて

自動運転（レベル4相当）実証走行

実施目的: 地域公共交通を維持していく上で、自動運転技術の活用は有効な手段のひとつ
自動運転技術の普及啓発を図りつつ、地域住民の理解度、利用者のニーズなど
社会受容性の向上を図る

実施日時: 平成30年12月2日(日)

実施想定: 立命館大学 びわこ・くさつキャンパス 大学構内
キャンパス内は段差が少なく幅員も広く、様々なルート設定が可能
今回は、仮想集落内に見立て、少人数乗車の
小型車両を用いて実施



自動運転等公共交通のスマート化に向けて

自動運転実証走行ルート



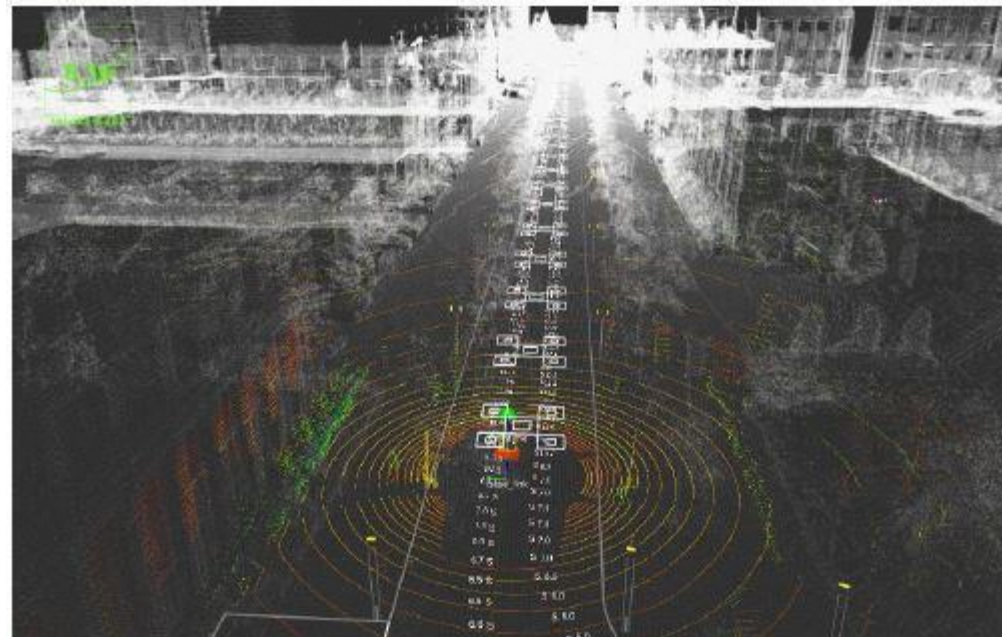
マイリー・エスティマ



2018年10月 事前3D測量



キャンパスプロムナード

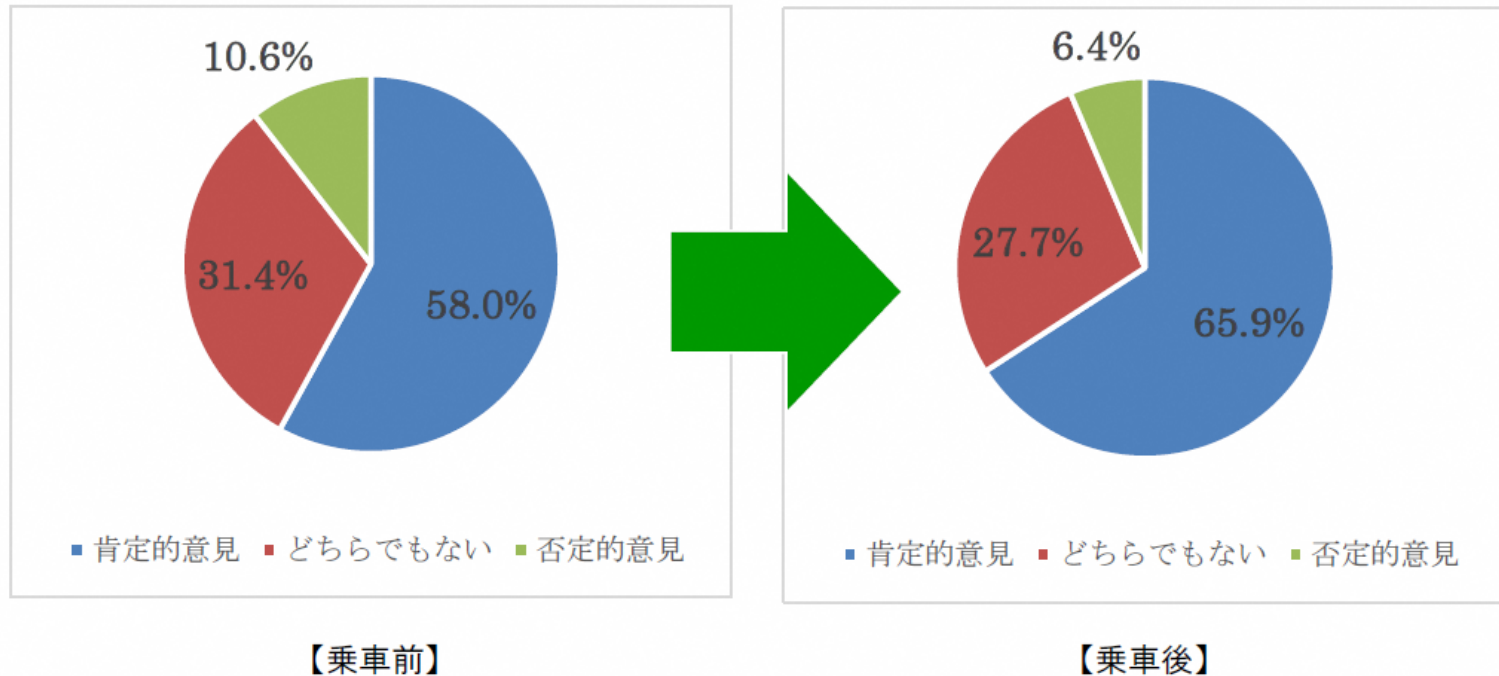


キャンパスプロムナード部分の3Dマップ

自動運転等公共交通のスマート化に向けて

自動運転 乗車モニターへのアンケート調査結果

- 乗車後は「肯定的意見」が 58% ⇒ 65.9% に増加
「否定的意見」「どちらでもない」合わせて 42% ⇒ 34.1% に減少
- 多かった意見：民間バス事業者が撤退したところ、生活地域と地域の駅など結ぶために導入



- 自動運転が実現することに賛成、より安全になると思う、より便利になると思う等の項目について質問

課題整理

社会実装に向けた実施可能性

○技術面の検証

安全性、サービスレベル、環境

○ビジネスモデルの構築(持続可能なサービス)

運営体制(住民、交通事業者、物流関係、行政など)

費用負担【手段(お金、人)】

コストの明確化(無人か有人か、その条件)

○社会受容性の醸成

自動運転システムの信頼性

自動運転のメリット

例) ・無人運転の場合

大学、公園、廃線敷き での活用

・有人運転の場合

一般(地域の人、福祉、病院)の参加

⇒ 地域の実情に応じた、持続可能な移動サービスを実現するモデルの検討

地域公共交通に係る検討の視点

交通の利用者・受益者

- 住民・観光・ビジネス等の移動需要への対応
- 地域にもたらす社会的便益、生活の質の向上

交通の従事者・担い手

- 交通事業者やボランティア輸送の
運営資源（運転手・車両等）の有限性

交通を支える財源

- 交通の費用効率性
- 行政・事業者・住民の間での
費用（投資）分担

これらの視点を総合して、地域生活の安全・安心な移動手段を維持・確保し、
来訪者の移動機会を増やすサービス水準の最適解を模索

Think about the future

これからの公共交通のこと

TRAIN BUS

Bike Cycle Walk

MM MaaS

自動運転

方向性 (向う方向)

活用性 (活かす方向)

受容性 (溶け込む方向)

融合? 統合?

• • •



2017年11月 東近江市
道の駅を利用した実証実験



2018年9月 東京都千代田区
自動運転タクシー実証実験



2018年3月 京都市左京区
自動運転カート実証実験



2017年10月 パリ ラ・デファンス地区
自動運転小型バス実証実験